

〔特集：子どもの育成と看護の役割〕

3. 病児の発達を促すための援助 —院内保育，院内学級の意義について—

北里大学看護学部

森 秀 子

はじめに

子どもの居場所は本来，家族や仲間と密接に交わりながら過ごすことのできる家庭であり，地域社会であることはいうまでもない。そこには子どもの成長発達を支え，育む機能や，生活に必要な諸機能が備わっている。しかし，さまざまな健康上の理由から入院生活を余儀なくされる子どもにとっては，病院が療養を行いながら日常生活を営む場所である。最近では入院の短期化が進められ病院は一時的な通過場所にすぎないと位置づけることもできるが，慢性に経過する疾患を持つために入退院を繰り返す子どもや，長期入院を必要とする子どもも多い。また，母子関係を築く出発点にある幼若な乳幼児，あるいは将来に障害を残すような先天性疾患のある子どもなど，成長発達に伴うニーズの充足を全面的に託している子どもも少なくない。このように個々別々の発達段階にあり，また様々な健康レベルにある子どもが入院生活を送る中で，院内保育・院内学級の存在がもつ意義について考える。

1. 入院と負のストレス

入院の体験は子どもとその家族にとって負のストレスを生じやすい。子どもにとって入院生活は苦痛を伴う病気体験に加えて，初めての検査や処置，抑制や忍耐を強いられる治療を受けながら，友達や家族から離れて馴染みのない環境で過ごさなければならず，不安や恐怖，焦燥感にとりつかれやすい状況にあ

る。発達のステージによつては，それらが自分に対する罰であると思ひこんだり，肥大した予期的不安に絶望を味わうことさえあり得る。子どもと家族にとってこうした身体的，心理・社会的な負のストレスは最小限にとどめる必要がある。また，入院していることによつて子どもの発達を促す保育や遊び，学習の機会が制限されたり奪われたりすることは無視できないマイナス面でもある。こうしたマイナス面が生じることを防止して，入院体験をできる限りポジティブなものとし，その面を強化することにより，子どもたちが健康を取り戻しつつ，豊かに実り多い入院生活を過ごせるような支援が必要である。院内保育，院内学級はその役割を担っている。

2. 院内保育，院内学級の目的と保育士，教師の役割

K大学病院は本学看護学生の実習病院であるが，小児病棟に院内学級が開設されたのは1974年（小学校），75年（中学校）であり，既に25年の実践経験がある。また，就学前の幼児のための院内保育も併せて実施され，実績も報告されていて学びの多い病棟である。

1) 院内保育について

院内保育ということばは特に定義されているわけではない。小児看護事典を参照すると，「医療保育」の項目があげられており，これに該当すると考えられる。平成10年度より厚生省の施策の中に「病棟保母導入促進事業」が予算化されたが，少子・高齢化の波の中にあつて，院内保育推進への環境作りとして

の意義は大きい。全国的には小児のいる病棟であっても保育士(保育)が導入されている割合はまだ少ないが、平成6年に全国医療保育研究会が発足して以来、医師、看護職、心理職、教育職の協力を得て、医療保育の進展ならびに医療保育士としての専門性向上に向けて活動がおこなわれている状況などから、今後の発展が期待される¹⁾。院内保育の内容は多岐にわたっているが、乳幼児にとって不可欠な日常生活のケアや遊びへの関わりは保育の基本であり重要である。K大学病院小児病棟では乳児および幼児病棟にそれぞれ1人ずつ常勤の保育士が勤務して、その役割を果たしている。入院中の子どもと家族、そして医療スタッフにとって、その存在の影響は非常に大きいものがある。

2) 院内学級について

院内学級は入院中の病弱児のために病院所在地の近隣の小・中学校を在籍校(本校)として、病院内に設置されている学級である。学校教育法第75条に基づき小学校・中学校の「特殊学級」のうち、慢性疾患児(制度上は「6か月未満の医療を要するもの」)を対象とする。しかし、現実には入院期間の長・短を問わず、入院児すべてにニーズがあり、活用されている。院内学級の設置状況は年々漸増してきているが、まだ、未解決の課題も多い。

3) 病棟における保育・教育の目的

病棟における保育・教育の目的については次のようにまとめることができる。

- (1). 馴染みのない環境からくる内的・外的ストレスを緩和する。
- (2). 単調な入院生活に潤い、変化、めりはりをもたせる。
- (3). 人とのコミュニケーションを豊かにし、治癒力を高める。
- (4). 家族や友達から離れた環境で他の子どもたちとふれあい、社会性を高める。
- (5). 新しい遊びや学習、特別活動により、生活体験の幅をひろげる。
- (6). 健康ケアの知識・技術を体得する機会をも

つ。

4) 保育士、教師の役割

保育・教育に携わる保育士、教師の役割は概略して次のようにまとめられる。

(1) 保育士の役割

- ①遊びの提供と相手をする事。
- ②身辺処理・自立への発達援助。
- ③情緒の安定、治癒力の向上に資する。
- ④子供同士のコミュニケーションの触媒。
- ⑤行事などの企画と実施。
- ⑥家族の相談相手。

(2) 教師の役割

- ①教科教育の実施。
- ②カウンセリングなどの心理的支援。
- ③病・虚弱にもとづく困難への対処法の教育。
- ④基本的生活習慣・態度を身につけさせる。
- ⑤教育による治療効果の向上
- ⑥家族の相談相手。

3. 保育・教育の実践上の工夫と効果

K大学小児病棟は、乳児、幼児、学童・思春期、NICUと年齢区分により、同年齢児が入院生活を共にするよう配慮がなされている。NICUを除く各病棟にはプレイルームが整備されており、学童病棟には院内学級が開設されている。病状・安静度がゆるせば、乳幼児はプレイルームへ、学童は学級へ「登園・登校」して時間割に沿って集団での保育/学習活動を行う。学童の場合、1か月以上の入院を要するという医師の診断があれば、転校手続きをとり、学級への参加が出席日数として認められる。病状等の理由から通級が困難な子どもはベッド上で行い、保育士、教師が個別に訪室して援助活動を行う。

病棟では、保育・学習の時間割がとっており、子どもが当番制で始業の放送を行うなど、自主性を育む工夫がなされている。子どもにとってプレイルームや学習室の存在意義は大きく、聞こえてくる笑い声や歌声・楽器演奏の音などが生活意欲をそそる一助

となっている。それに伴って一時的な参加者も多く、受け止めには課題も多い。

1) 保育のポイントと効果

病棟のオリエンテーション用リーフレットには保育実践のポイントが次のように記されている。

入院という制限された生活の中でも一人ひとりがその子らしい生活を送れるように尊重すること。また、入院の意味を理解できない低年齢児にとっては突然家族から引き離されて不安と恐怖のただ中にあるので、日々の医療行為のみに流されることなく、家庭や園、学校などの慣れた雰囲気におくことで少しでも安心させること。たとえば、授乳・食事介助については「くわえ飲み」やベッド上でひとりで食べる子どもを一人でも無くし、個々に合った介助方法を工夫し、必ず声かけをすること。子どもらしい住環境を造るために午睡時間を活用して壁面・窓面の装飾作りをすること等々細やかである。そこには子どもはもちろん、家族、医師や看護職、他のスタッフの日常の活動を理解し、協働して病棟生活を充実させていこう、という姿勢が盛り込まれている。

こうした保育実践によって、次のような効果もたらされている。

①おむつ交換、授乳介助、食事介助、抱っこなどの個人的なかかわりをおして個々の様子が把握できるとともに、安心感を与えることによって、子どもが安定した気持ちで入院生活を送れる。②子ども同士のふれあいを大切にする集団保育、ベッド内の個別保育をおして、子どもの世界を提供でき、病気をもちながらも子どもらしい生活を送れる。③食事、排泄、睡眠は個々のニーズを十分満たせるように配慮することにより、基本的な生活習慣の退行を最小限にとどめ、成長・発達を促すことができる。④家族とのコミュニケーションを密にすることで普段の生活に近づける。⑤子どもの目の高さになることで安全、快適な環境をつくることことができる。

何よりも、温かみのあることばかけや抱っこなどのちよつとしたふれあいの中から信頼関係が生まれ、徐々に落ち着きをとれどし、子どもらしい笑顔

が見られるようになってくると同時に親の不安を和らげることが患児の情緒安定にもつながって、療養生活にプラスの効果をもたらしている。

2) 教育のポイントと効果

病棟では、近隣の小学校、中学校の専任の教員によって児童・生徒一人ひとりの実態に応じた授業実践がなされている。必要に応じてボランティアが導入され、きめ細かで行き届いた活動により効果があがっている。教師の役割を遂行する上でのポイントは、①厳しい条件の病院生活における不安や不満を早期に解消する手だてをとること。②教科指導には内容を精選する。③生活単元学習(総合学習)は学級全体が取り組めるように工夫する。④養護・訓練には計画的に散歩などを取り入れること、などである。

また、さらに次のような数々の工夫に日頃の努力を伺い知ることができる。①どの年齢層の子どもにも活動に参加することの楽しみが感じられるように工夫する。②生の材料を使い、遊びを創作する。③ケーキや雑煮など行事や季節をとらえて実際に作る。④活動に多様性をもたせる。⑤家族に見せたり、次の入院児に伝えられるように形が残るものを作る。⑥目安を持ちやすく、振り返りによって自他の良さを認識できる活動を取り入れる。⑦作ったケーキを病棟スタッフに配ったり、ハンドベルの演奏、クリスマス会などの行事などみんなで力を合わせたり、関わりを生む活動を組み立てる、などなどと長年の実績の中から生み出されたものである。

教師による院内学級の実践活動は以下のような効果をもたらしている。

(1)入院中の子どもの発達権・学習権が実現される、(2)入院中のストレスが緩和される、(3)家庭・園・学校など地域社会復帰への通り道となる、(4)総合活動を行うことが学習参加を促す、(5)参加することが表現活動・自己実現になり、明日へのエネルギーとなる、(6)異年齢、病種の多様性、参加の流動性を越えてみんなで同じ方向に歩むことにより学び合いがある。

プレイルームや学習室には開始時間前から子ども

が待っている光景があり、また、明日の散歩を楽しみにすることで今日の治療を受け入れることが容易にできるなど、波及的な効果も大きい。行事にはベッドに寝たまま参加する子どももいるが、わずかな表情の和みから十分参加を楽しんでいる様子が伺える。

これらの活動がスムーズに展開するためには、病棟全体のスケジュールを子どもの生活を尊重することを前提に組んでいること、すなわち保清は学習時間までに済ませるとか、処置や治療行為は時間帯をずらして実施するなど、保育士、教師、看護者、医師その他の協力関係が保たれていることも効果をもたらしている要因となっている。

3) 院内保育・教育の意義

以上のことから、入院児にとって院内保育・教育は入院生活による負のストレスをポジティブな体験に置き換える原動力となる活動である、ということが出来る。マイナス面が前面になりがちな入院という事態を、子どもにとって健康を意識し、病の回復、あるいは病とのつき合い方や共存を学習する機会としてとらえられるようになることや、さらには入院という事態から、家族のあり方を意識しとらえなおしたり、そこでの仲間やいろいろな役割の大人と交流して社会性を高めるなど、子どもの成長・発達に必要な様々な要素を提供すること、そのことが院内保育・院内学級の意義であると考えられる。

4. 保育・教育・看護の協働関係とシステム

入院生活においては最適な医療を受け、健康レベルを向上することが目的である。医療技術が進歩し、専門分化する中で他の多様な領域から専門性の確立に向けた動きが見られる。病棟では種々の専門職種が協働しているが、それぞれの専門性を精錬しつつ、子どもをトータルにケアする観点を相互に尊重しつつ融合する関わりがさらに強化されるべきである。これを可能にするためには現場のシステムと協力体制：場所、時間、人材、予算、の確保に相当の努力が必要になる。その推進役として24時間、最も身近な

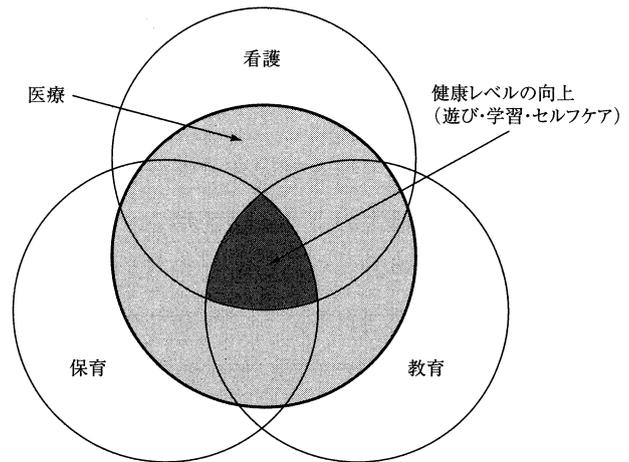


図 保育、教育、看護の協働関係図

立場にあつて、子どもと家族をよく理解している看護職が適しているが、孤軍奮闘ではなく他職種と連携する「新しい」システムの実現を指向することが望ましい。新しいというのは必ずしも「別」の意味ではなく、現行のシステムを連携して活性化し柔軟に運用することである。図は保育・教育・看護の関係を模式化したものである。活動の場を共有する場合、独自性を発揮する側面と、重複し連携・協力しあう側面があるが、この関係図は、保育における遊び、教育における学習、看護におけるセルフケアをそれぞれの核として、協力して心身や社会性の成長発達に貢献し、医療を受ける子どもと家族の健康レベルの向上を支援することを表現したものである。白い部分は、健康的な地域生活へのひろがりを目指す。

5. 今後の課題

K大学病院、小児病棟における院内保育、院内学級には4半世紀におよぶ実績があり、その効果が確認されている。一方、病院における子どもの看護「勧告」(1986年、WHO)の提言を参照し、前記の協働関係のあり方を踏まえると今後の課題は次のようにまとめることができる。

この原稿では病院内の保育・教育を考察の対象としているが、基本的には地域をふくむさらに大きなシステムの中に病院を位置づける視点で考える必要

がある。そこでの看護職の役割は入院児と家族を入院に至る以前の生活、退院後の生活を一貫したものとしてとらえての援助を提供することである。そこで重要なことは常時子どもと家族の健康な側面—治療力を信頼し尊重して援助の関わりをもつことである。保育・教育にはもともとこの観点が備わっている。ともすると医療最優先の観点到支配されがちな看護職にとって、保育職・教育職の基本的な姿勢は大いに示唆を与えてくれる。協働関係者として大事にしたいものである。

おわりに

今回、与えられたテーマ、院内保育、院内学級の意義について考えた。院内の実践活動についての考察

から地域とのつながりをもった視点で行う子ども・家族への看護ケアの重要性を提案したい。小児ベツト縮小の社会的な状況があるなかで、将来、世界を担う子どもを育む基盤がそこにはある。この視点を確かにするために、実践的研究に取り組む必要がある。

文 献

- 1) 帆足英一：医療保育，小児看護事典，小児看護，22 (5) 527, 1999.
- 2) 谷川弘治：院内学級，小児看護事典，小児看護，22 (5) 528, 1999.
- 3) Weller, B.F. (鈴木敦子，他・訳)：病める子どもの遊びと看護．医学書院，東京，1998.
- 4) 北里学級—開設20周年記念誌—：北里学級20周年記念事業実行委員会，1994.
- 5) 青柳佐智子：院内学級に通う患児への援助と教師とのかかわり，小児看護，16 (11) 1470—1473, 1993.
- 6) 北里大学病院小児病棟パンフレット，リーフレット
- 7) 担任教師，研修報告